

## 第 11 回こうべ大会を終えて

こうべ大会事務局長 松岡広路

学会員をはじめとする約 300 名の参加者のご協力によって、神戸大学において開催された第 11 回こうべ大会は、無事、その幕を閉じることができました。まず、交通の便の悪い六甲山中腹にまで足を運んでいただいた全国のみなさまに、深く御礼申し上げます。また、一年半にもわたって、実務能力の乏しい事務局長を励まし、支え、導いてくださった実行委員のみなさま、事務局スタッフにも、この場を借りて心より御礼申し上げます。

閉会式での阪野貢学会副会長の心温まるごあいさつと大会終了後の山崎美貴子学会長の実行委員・学生スタッフを前にしてのねぎらいの言葉に、涙ぐむスタッフもありました。私自身、終了当日、大学からの帰途、あふれるものを堪えきれず、何度車の運転を止めたことが。多くの人の力によってこの大会が創り上げられたことを思うと、今も目頭が熱くなります。パネリスト・発表者・スタッフ・参加者のボランティアリズムと協働が三日間を創り上げたといっても過言ではありません。本大会のテーマ『ともに創ろう共生の社会 被災地からの学び』にふさわしいプロセスがそこにあった、あるいは、大会にかかわること自体がボランティア学習になったとでもいえるでしょうか。少なくとも私は、多くのことを教えてもらいました。

しかし、この大会のめざした「これまでの 10 年をふりかえり、これからの 10 年を構想する」という点においては、情緒的にふりかえるわけにはいかないでしょう。実行委員会成立当初から、三つのポイントが議論されてきました。第一に「何のための研究か？ 実践に対して学会が果たすべき役割とは？ 実践と研究はどのような関係を築くべきか？」、第二に「だれのための実践か？ 思いやり・やさしさの内面化に収斂される実践でいいのか？ 被抑圧者・当事者の現実変革とどうタイアップするのか？」、そして第三に「何をもちて福祉教育・ボランティア学習というのか？ 福祉教育・ボランティア学習実践は本当に教科教育と同じような実態をもっているのか？ インフォーマルに組み込まれている福祉教育的なるもの、ボランティア学習なるものに目を向ける必要があるのではないか？」というものです。各フォーラム・課題別研究は、こうしたポイントをふまえて幾度となく討議され計画されたものです。いかがだったでしょうか。まさにこれから、「果たして、そうしたポイントを明確化しえたのか、それをめぐって討議が深められたのか、そのポイントを深化する契機となりえたのか」が真摯に問われなくてはならないでしょう。

また、本大会において、新しいどのような研究・実践の機軸を、参加者のみなさんは意識化されましたか。学校・行政・社協だけではなく、NPO やボランティア団体を中心とする第三セクターでの福祉教育・ボランティア学習の実態把握と創造、平和の維持・創造と連動した支援実践の展開、実践評価に不可欠な研究枠組みの構築、批判的教育を基礎におく実践方法の追求...などなど、討議・追究すべき課題は山積しています。本大会を契機に、今後のみなさんの研究・実践に反映されることを願うばかりです。

「これからの 10 年を構想する」ことは、もちろん、いまだ途上です。これからの学会活動に引き継がれ、来年度の埼玉大会で再び結晶化するのを心より楽しみにしております。また、本大会の運営を通じて新たにつながった仲間たちと、われわれもがんばります。福祉共生社会の創造に資する教育・学習支援実践を軸に、われわれとみなさんがひとつになって、社会の大きなうねりを生み出していきたいものです。

(なお、大会ホームページ上に報告特集を掲載しています。ご意見をお寄せください)